

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-11C	12-070	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>		
<p>An observational study to determine the prevalence of alcohol use disorders in advanced cancer patients</p> <p>進行したがん患者におけるアルコール性障害の罹患率特定の観察研究</p>		
<b>執筆者</b>		
Webber K, Davies AN.		
<b>掲載誌</b>		
Palliat Med. 2012 Jun;26(4):360-7		
<b>キーワード</b>		
アルコール、アルコール性障害、アルコール中毒、良性/悪性新生物、待機療法		
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b></p> <p>北米における観察研究でアルコール依存は進行したがん患者における共通した問題であり、身体的・精神的症状による高い負荷と関連があることが示されている。本観察・横断研究では英国の進行したがん患者における全ての種類のアルコール性障害の罹患率と身体的・精神的症状の負荷の大きさを検討した。</p> <p><b>方法：</b></p> <p>進行がん患者、英国がんセンターの待機療法チームに紹介された患者、同意が得られた者、研究を完了できる者の全4条件を満たす被験者が、サンプルサイズ計算で算出された120名に達するまで募集した。被験者はAUDITとHADS、MSAS-SFの各試験を完了した。アルコール摂取とMSAS-SFの点数、個人の症状に関する点数の間の相関、およびアルコール性障害を予測する独立因子を特定するためにロジステック回帰モデルを使用して検討を行った。</p> <p><b>結果：</b></p> <p>120名の被験者が試験に参加し、22名の被験者(18%)がアルコール性障害に該当した。本研究ではアルコール性障害と喫煙の間(<math>p &lt; 0.001</math>)とアルコール性障害と頭首部の癌診断の間(<math>p = 0.002</math>)に有意な関連が確認された。しかしながらアルコール性障害と不安(<math>p = 0.38</math>)の間やアルコール性障害とHADSを用いたうつ病(<math>p = 0.805</math>)との間、アルコール性障害とMSAS-SFのGDIを用いたうつ病(<math>p = 0.142</math>)との間、アルコール性障害とMSAS-SFのPHYSを用いたうつ病(<math>p = 0.734</math>)との間、アルコール性障害とMSAS-SFのPSYCHを用いたうつ病(<math>p = 0.154</math>)の間には有意な関連は確認されなかった。現在の喫煙歴のみがアルコール性障害の唯一の独立した予測因子であった(<math>p &lt; 0.001</math>)。7名の被験者が高リスク・アルコール性障害に該当した。高リスク・アルコール性障害に対する独立した予測因子は現在の喫煙歴(<math>P &lt; 0.001</math>)と男性(<math>p &lt; 0.001</math>)であった。</p> <p><b>結論：</b></p> <p>がん患者におけるアルコール性障害の罹患率(18%)は英国民のアルコール障害の罹患率(24%)よりも低く、もはやアルコール性障害はがん患者特有のものではない。またアルコール性障害は不安やうつ病といった身体的・精神的症状による高い負荷と関連がない。うつ病に関しては高リスク・アルコール性障害と関連があるので評価が必要になる。</p>		